張本甲戌軍記 三編

三

2258
27

へ 13
2258
27

池清

繪本甲越軍記三編巻之三

目録

石井羅三郎南郷を創る事
春藤石井と猟る図
石井羅三郎走り馬と止る図
長尾景虎小縣出陣之事
再海野平對陣之事
鬼小島弥太郎武田家へ仕者の図
鬼小島弥太郎勇戦之事

三尾寺合戰之事
安中紙兼守武勇付國
武田堀伏安中勢と討事

553

繪本甲越軍記三編巻之三

石井孫三郎南部小劃事

天文十八年四月武田大膳太夫兼信濃守源朝臣晴信伊奈木
曾松本三ヶ所小手遣ある所より味方勝利の旨追々注進あり
うべ此上ち大將直ち發向有て松本筋より諸城と屠り小笠原大
膳太夫長時が深志の城と攻むべし木曾筋へは南部下野守馬
場民部少輔信奈多彈正忠發向し其利藤藏内蒙後理正
よりと合せ木曾左馬頭義昌が御嶽の城と攻べしと命ぜらるる
各其用意あり所小俣は南部下野守が出陣と上あられて追故前
甚紙皆と尋ぬる小南部下野守ら武田家に一戰よしく諸士の
望る敬重く武邊ち其利備前守板垣故駿河守小山田備中守

飯富兵部少輔よ次し覓へのくもあるとかぐも生質己と嫉み功と猜嫉人の善と聞ても耳聾の如く惡と聞ても笛吹ぐ如く美

秋意ふ暮されば去年み月信州よ於て保志孫持の世石沼大隅守と対く其妻娘と棄ひ取大隅ぐ女春路ゑ頗ぐ美色ありぐ

もれ共く已ぐ妻ゑ昼夜側と放ゑび寵愛もれ共ぐ春路ハ父の雙書ゑふ南部ぐ妻と成る事と無奈よ思い母と示し合せ支の敵

父の仇と報いんと思へども大剛の下野守よ憑ち手と出し難く渠ぐ手ふ死んとも此ぐ勝れば人の手と借く討得んと計ども甚

んとん程よ弱撰む下野守よ組の中ふ石井藤三郎と云大膳不敵の者あり渠と聞し下野守と対せばやと石井よ會ふ毎よい

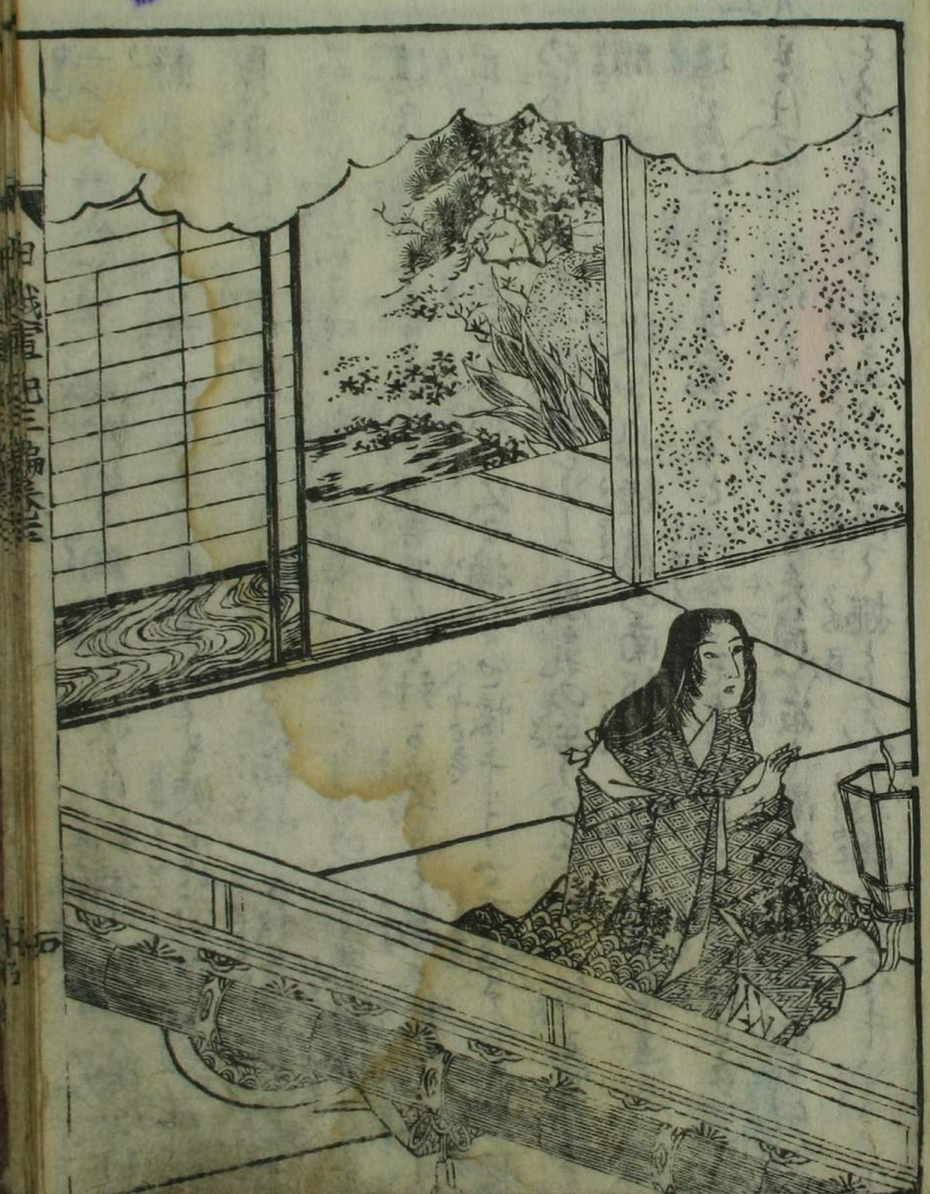
偷眼ふ情と送れど無骨の石井覓知ぬ様ふ徒ふ空しく日ぐ送

ん程ふ一日石井藤三郎御仕落あり公短急の南部大よ憤り石井と捕へ成敗せんと思と春路移くよ言宿あり南部も流石春路ぐ言香ぐ難く石井ぐ組下と成よ下ける石井奇き命と助うと思ども猶己ぐ心程よ理非の変動ぐ成ること独ひ南部ぐ情ぐ知れぬべ憐ふ焼く居くうしぐ四五日過く後夜更く戸と叩く者あり藤三郎怪しく自ら戸と開ければ十二三歳ばかり女ぐ石井益怪んで子細ふ尋ねれば女声と低し春路君の命ぬ中ふ車みあれば思ひて満房ゑ毒ぐ世給へ教道ゑ上べしと云ふ藤三郎も不審ふぐ宵後ふ捕ぐ賓戸ゑ入く看れば春路ぐ待ち兼ぐる面ぐ成て石井と迎へ猪ぐ先酒と勧めて藤三郎と況ぐ成て後石井ぐ

耳小口とゝせくゝしゝくゝゝ此間君の危ふきと聞あせつゝせども殿
心程の怒り解給ゝど君と憎いうみて害せんと計り給へり妾種々
連申とゝ共も聞入給ゝず給ふの沛傷敷さ今夜ゝ殿の留主と
幸此車と告ゝ知ゝとゝ謀しやうみゝゝれば思慮淺き藤三郎
大ゝ驚ゝ計り敗缺と左程迄ゝ憤り我と害せんと謀り給ふ社
眼ゝあれゝゝ立退く身命と全ふし此眼と援せんと眼血を
ゝゝ出へゝれば春路大ゝ笑ひ立退き給ふゝも必追人とゝけく
押へ給ふべし君ゝ武勇ゝて五人十人ゝ討取給ふもいで大勢ゝ
敵し給んや空しく歩卒計手ゝ大死仕給ひぬと威しゝれば石井
大息と絶絶ゝ此上ゝ如何ゝてゝ身と全ふせんと正没擺布
ゝふ体と覩ゝ春路低言ゝ謂ふ左而也深くも驚き給ひて須更

の程ゝ妾言ゝ甚間ふ如何ゝもして南部殿と害
して立退給ゝ沛命別条ふゝんゝ方ゝ人時い自らも連
ゝ立退給へ約束ゝ君ゝ心ふ任せまゝせんいゝ縁ゝ君ゝと
暮ふ心の止ゝ期近心と尽ゝ候ゝ計ふ儲添ゝ調艤
ゝれば石井も此程の風情始ゝ覚ゝ春路ゝ妖艶ゝふ加ゝ
心蕩け是ゝ南部と害せんと付隙ゝも教ゝ遺間ゝれば
手と空しく日と経ゝ処今年四月晴信信州ゝ後向ゝ南部下
野ゝ細畏ふ狗林佐渡石井藤三郎倉部長七左衛門草間源
造今禍等計七十騎の細畏と共ゝ従ゝ有しゝ名ゝ日長
坂左衛門尉ゝ馬物驚しゝ綱と切て地出ゝ歩卒迄彼方ふ追ふ
程ゝ馬ゝ弥驚ゝ八方ふ地巡ふ折節石井藤三郎徒ゝ集ふ

甲種 556



疲くる時分と伺い馳かゝり綱と馬ふ投うけ引倒して已が陣へ引
帰ふ長坂が歩卒ども石井ゝ馬と乞へくる渡さじ南部も仕と返く
馬と返とべき貞と云へどる石井返さじまじ南部ゝ我言ふ虎と怪
石井と陣取ゝ呼ぐ散々ふ罵れば藤三郎公の理ふ春語が言へるゝ
違ひぬ無理と言うけ我と害せんと計る成べきと忽ち怒りと発し
武士ゝる者が馬と取放ち人ゝ捕へさせ懐手して取返さんゝ思ひ怪
の挙動あう丈ふ荷騰ゝる虚氣の至りいうで返し得させんゝと
眼と怒りして従へざれば短慮の南部潤とせたゝ馬と返さ給ば
返さあ迫我と虚氣あうと嘲嘆ゝこと奇怪ゝうと力の拙ゝとかく
ゝ捨ば石井ゝ縋うと傷ゝあう矢筒と取ゝ南部ゝ投付飛騨ゝと
ゝう処と南あふ兵卒ゝる三隅ゝ掘ゝんと取囲ゝと石井ふ浮ゝう

と近寄ゝ歩卒三人と切倒し四人ゝと負せ南部が陣屋ゝ繰ゝる
潮利武部ゝ丈が陣ゝ乗入死物狂ひゝ切ゝ廻ふ折節山本勘助
ゝ軍議の為潮利が陣屋ゝ居ゝ合ゝ捧と遣ゝ有合ふ捧と取ゝ
ゝう向ふゝ挑ゝ向ふ大兵の石井小藤の山本ゝ向ふ形勢宛ゝ金剛
力士と嬰子と打合ふ如ゝ乗ふ絵踏の動作自在ゝる勘助ゝ
ど対ゝ白刃と挑関ゝる体飛ゝる如ゝ跳ゝ上り飛違ひ忽ち石井が白
刃と叩き落ゝ馳ゝる駆ゝ寄ゝ藤三郎と二三間彼処小流倒ゝ剛兵
の石井山本ふ蹴ゝれゝ体卒ゝる如ゝ眩ゝと押へゝ縄と
南部が陣ゝ引ゝ首ゝ刎ゝる此時勘助
も三箇所の潮瘢と蒙ゝる勘助ゝ弧邊の時も放ゝ討の時も数度
ゝ死の瘢と蒙ゝる事 八十六箇所大兵の藤三郎とゝもちゝく搦

捕うて車流石山本勘助が手練らくと人称しくらべ下野守実て
物嬢の持病発し山本ら兵法遺ひと聞し小石井が妙に小鬼頭厨よ
手と負くらくら未熟の仕業其が面歩が一ホも足ざる男ども渠種張
が余と震あて惑とも國郡と持ぬ者が実球取陣取覚東ら
紅拝医者も深に変ら行ぞ晴信の誑と信仰あらて
行腹痛しと洗うしと晴信聞給ひ大剛の勘助と悪口とうい偏
う軍事ば穿鑿閣に乗ら
新右ニ門三人ら命じて三箇条の書付と仕くら下野守と改易ぞら原
其一ら曰山本勘助小身者乗球取陣取信しうぬ由とも条紙事
と知らぬ言ら周文王が崇敬ら大公望ら大身ば者らしや其
二ら曰兵法遺ひの手と負くらくら未練の由繊ふ条武道不案内ば

言ら兵法の事手と負ぬとらくら非ど手と負ふ共相手と仕
果ぞど兵法なら今度其方が被官石井嘉三郎と勘助捧ふく
向ひ組倒をたく勘助死うも戸ば上の答ふべきと猪後ろハ
無穿鑿ら事其三ら曰其方手柄と事々敷ト募と申ば汝が
武勇小あ共春日左衛門笠井備後守が仕ると社ら柄の揉ふ
申事人の功と奪ふ似うら右三箇条と仕ら成敗あるべき所山本
が逃或ら存ぞべき間勘助ら免じて命と助る間遠国へば逃べしと
て追放あら南部が七千騎の足軽籠本と緒捧へ分ら春日左ニ門
笠井備後守ら南部が長士の子らくしべ下野守小従て浪
人せんとると両人が勇武と勝ら給ひ止あて山本が組小ふ
下野守ハ浪々の身らら奥州會津ば幽居し後彼述うく

甲越 559

病死あり

長尾景虎小縣出陣の事

武田晴信諏訪に在て伊奈木曽松本の三方と指揮し合戦の動静小笠原が深志の城と責んと支度ありければ三方の諸將大に驚き越後に急と告ぐ武田晴信當國に發向し伊奈木曽松本筋と乱妨放火し保志奈と降し既に其等が本城に責籠んとせし急ぎ御出陣あり援い給へ其等又籠と出して手遣い仕るべしと高梨摂津守直江酒椿直江山城守信と有益の一戦と逐べしと高梨景虎に晴柴田入道乃齋安田上総介宇野民部少輔同左馬介宇佐美駿河守長尾遠江守中條越前守方貫寺添藏天川後河守下条

薩摩守和田喜兵衛千坂監物水間掃部頭山本寺宮千代丸行俣筑後守山本寺伊豫守井上兵庫助須田相摸守上条弥二郎新津彦治郎齋藤下野守宮島三河守南雲治部左衛門渡邊越中守長尾色四郎元井日向守以下八千餘人四月二十四日信州に小縣に著陣し近邊と乱妨なり先武田の一將侯田兵部少輔が岡山の城と攻干んと城と二千重に取囲て息とも継さに責られ城中よりも矢石と飛し手痛く防げども猛勢に越後勢組兵急よ対程に矢石と降し便りと矢い玉と竜小路ふられば城兵等十方小昏頭に成て本陣小急と告る危ふき事旦夕に候早く御勢と向らるべしと援と乞ひ城中と火水と切く防げども士卒等も心身疲れ今日一日保つべくもなんざりなれども城に兵部少輔

×敵

へ世こそ恐ろく色なく敵ハ動作と目も放らず睨こ結てぞ居らしが
諸士と問め景虎が今日ハ軍の仕様と視るふ様と一挙ニ攻落さん
と呂ふ故ニ我強勢ニ乗ニ乗ニ呂ふ而也眼と付て備へいあ〳〵て
ゆ〳〵ふ此度ニ乗ニ切崩ニ明ニ首と獲ニ授ニ死生両端ハ合戦
とべー遠藤次郎八森住勝左門川尻但馬波多野求馬野呂木仙
左衛門大布施戸野山星野源太左エ門戸石佐木等ハ八百餘人
と三段ニ備へ兵部少輔小姓ニ命じて焼飯と肢く喰ー汝等ハ合
せ〳〵と出せ〳〵進めく取て食ふ者ハ呂森住勝左エ門川尻但馬波
多野求馬西也御相伴仕るべしと焼飯とくて食ハ無らく
戦人と門と八文字ニ組ニ龍の渡と巻が如く真黒ニ出黒
〳〵ニ〳〵る城後勢ハ真中へ喇と呼び四角八面ニ対ニ〳〵る城後勢ハ猛

×敵

勢ハ対崩されて組と引安田上総介柴田入道万貫寺源蔵入ぬり
飯富勢と突出明せば兵部少輔眼と怒〳〵後と顧ふ心あらべ一人も
生る者ハ独ハ無きぞ力ハ目釘の續ん程戦ふく切死せ〳〵と
鎗と捨ふ真先ニ馬と出して突めば遠藤次郎八森住勝左エ
門川尻但馬波多野求馬ハ始終兵部少輔ニ引續き勇と奮ふ
く戦へば飯富勢足と立直ー心死と為ハく戦ひ遠藤次郎八波
多野求る大布施戸石等二十八人討死と城後勢ハ中ハ親矩
六郎兵衛高宮重左衛門年礼年人中原宗左エ門等討死ー
其外雨軍の勇士雑卒死傷ハ者数多く兵部少輔ハ目ニ餘ル大
軍を馬
八方ハ敵ニ囲ハ向ハ者と切落ー雑倒ー鎧元
迫血ハ深〳〵ふ大ニ力と内ー踏つ乗ニ安田が勢ハ心中へ堪と呼せ

刻を入四面より向ひ八方より當るを幸ひ三向より斬て胸板を刻
付切掃て大熊新藤が勢よりて入懐声々猛虎の乳るが如く千
變万化の勇を震ひ八百餘の勢を以て項羽とも歎く紙後勢八千餘
人と云回を追打しを縁に希代の勇名ある天将景虎此所にて
く兵部少輔とやうんが働に流石の晴信が武備に似く勇を
る拳動ふる引色んで討んに安られど斬る勇士を殺を不思議
どして揚貝と吹せ軍と引上給へば兵部少輔も
死と一塗に変し景虎と勝負と変せんと割り不敵小も景虎が
跡と追ふ事十八町ばかり景虎勢と早く引揚て構いざれば兵部
少輔も是迫て勢と引ふ内山の堀にぞ駆入る引も良り迫ふ
も勇士と人皆感称せり

再海野平對陣之事

紙後勢信州に發向あらんれば小縣近邊の武田方大に騒ぎ晴信
が本陣諏訪に使を飛し出勢と乞ふ事弥急なり大将晴信ハ
諸方に告と聞景虎が容易に敵に出陣遅々せば内山に堀
危ふし迚松本筋の發向と止め先に松本筋へ遣る板垣弥治
郎日向大和守原加賀守が輩も軍と小縣に向ふべしとて
其勢一万餘騎揃に揃ぐ小室に著陣なられば小縣近邊の
武田方騒生る心地して狼ぐ事限なし景虎武田が出
陣と聞く大熊備前守吉江織部丞騎て候寄が内山の堀
と押へ矢澤の奥より出く海野平に出く甲州勢と對
陣あり両陣より斥候と出し敵の虚と討んと伺へども

563

甲越

智勇絶倫の名将が陣を張られい毫釐も透ちぬ程に射
敷軍と出さば五間相日より五日の間矢一筋も射合さで備を堅め
睨み合ひ和へ合ーが古日は朝景虎鬼小島弥太郎と晴信が陣
へ遣つて言送られくるを東当国は物と出る事信濃国と従へ
領せんと欲する心と掩へ非ず村上義清を頼まれ武の一道と
守る義戰而已是武の正事と得ざる所なり願つべ民の憂吾
と嘯く村上と本領へ還住させて和親あらべ某が悦び何事か是
ぶ出うん是還住の義同心無
の堅陣へ馳入右無の勝敗と一戰
信州へ出張ー貴陣と對陣とし
ど候いき願くい他國の諸將へ向ひ武威と震ふが如く我ふ

對ーても又勇戰と励まるべー我武勇とふとも他の諸將と
奚異らんや御同心あるへ却て速へ和義と結へ帰國仕
るべー御同心なるを於ては明日へ快く見参一戰の勝負と決せ
るだーー必常と寄る事なうれと云場まる晴信答へ其方村
上へ頼き當表へ出張武の義ともるる事心操艶く神妙へ
覚へ晴信深く感ードへ候我も敵味方とも勝負終りて
穿鑿致を事昔が今ふ至る迄右習いて景虎の志最へ
候ども村上と葛尾へ還住致ざるハ我ふの働仕候得べ
晴信が一命めぐん内ら思ひもよらぬ仕候得共あるて合戰を
望ふ於ては貴殿へ軍と始め終へべー某へ軍へ廻ーと
べーば候若へ維人ふるかれ某が本國へ手と入ーふ明ーて

其時越後信濃より加勢して無二の一戦と聞あ候べしと返事有て
使を返されれば景虎も甲州勢より軍と出さると聞いらも
もして駆引出さんと陣を油断の体よりて備へと疎して一
戰を待さる形勢と示されしう晴信も昨日の答へは景虎が油
断とおさんと虚と伺ひ一策を対揖ぐんと維盛小紛して越後
陣と付候し給ふは越後勢が体備疎して敵は虚と示し是は
乗じて敵まじば一番は為んと臥竜の勢ひ以て吉と揺
い玄蕃も渡り沈もりざる景虎廟が謀略は我奚陣らんや
弥陣と固め与うと心し一人も備へ外へ出べらじと厳しく命
られしう景虎も又雑兵の内小もぐりて甲州方へ備へと付候
仕給ふは益堅陣よりて何もの所へうも付入べき遠ちられば其日

甲越 565

もも空しく過十日の朝景虎又鬼小嶋弥太郎と以て甲州の陣へ
言場られるい去めて翌日より今日小至て十日鬼角小一戦
と挑て給ふ間者体は見へ候上は徒らに小此地は日と遂らんよ
つて其結登城中は方小出張候べしと言送り其日の午刻到
陣掛ひして徐々と引取る陣勢堂々として甚見事なり

鬼小島弥太郎勇戰の事

斯て長尾平三景虎より信州へ軍と遣同年六月城中
と対ぜしと舘四郎兵衛景高蘭藤小野寺朝綱北条安房
守長朝杉原常陸介長尾遠江守藤景耳柏備後守清長
山吉孫治郎親章鮎川摂津守元井日向守安藤八郎兵衛
庁貝式部川岡對馬守山岸宮内神藤出羽介沼掃部石川

備後守ト平弥七郎鬼小嶋弥太郎大橋弥治郎と始め諸大将
卒し紙中囲よりて入遊佐備中守が篭る城を押寄
嶮阻と厳つと無二無三に攻上り紆を結ひ城中より
も鏃と揃へ矢と射る事雨の如く矢間と開いく鉄炮と鈎瓶
を放ち麦を専途と防げども城外小荷駄後勢只一息に乗崩
さんと柵逆茂木と引破り射出すもあるも痍ども喰と
城中小原荒荻を城と築んと曳く声して弛登る鬼小島
弥太郎を一番乗と心掛城中へ弛懸る城中より放り出
弥太郎が股を貫いく瘢と蒙るも此無屈ぶと思ふ槍の
柄と縄を四五所結びて足溜りと走り付て鎗と立掛弛
上り荻より先に取付る足軽の肩ふるとうけ組立こうへと

鎗と腋狭に汀手と城に掛曳と一跳飛上る彩勢に蝶鳥の如
く城の上に踊り上り城脇小付る武者二人と突倒し城中く
跳り入鉄炮武者三人と突殺を是と見て身粕動り元井石
川山吉が勢荻がからと乱迫く早此手より崩して城中小
乱に入城兵等城に三の丸に逃篭り合縦して国中の
諸将が援と待居る此戦いと聞く土肥唐人魚津浦山滑川
の諸大将遊佐と援んと相候と出して伺へども景虎援兵の
備へ厳しく近寄ぶく見へ安閑して孫兵衛
遊佐と紙後勢小勢に責討れ今と弓折矢尽て備中守
降人と成り出り景虎手始めに人質と受取遊佐
が本領と其侭に与へ給へば是と聞く土肥ト野守土屋右衛門

太夫兼て景虎が武勇を歸伏してくれば各人質を出し
越後を降る景虎此諸大將を皆兄の如く嫌と守らせ給へ
馬を使ひ所小神保安藝守推名波松岡左衛門長法寺
三方より押寄る景虎伺候と出して伺ふに越中勢
守り戰いを怪じ使ひれば拳小ふして敗北と察し今
一度弱氣とゝせ獨も敵と驕らせ後討べしと取物も取
敢ず越後へ軍とゞ歸されるる

三尾寺合戰之事

同年八月武田晴信と景虎越中發向の間小上杉民部少輔
憲政が領國と暴めんと上野國小軍(出)相模境神奈川
押結近郷と放火して引取給ふと上野国安中の城主安

甲総567

中越前守同左京進和田城主和田左衛門尉同岳部丞箕輪城主
長野信濃守倉ヶ野城主倉ヶ野六郎同淡路守師岡城主師
岡山城守松井田城主松井田越前守松枝白倉上田等計九將
晴信が出馬聞次第ると三千餘人武田が引勢と喰止んと
無川の此方和田城の馬をなる三尾寺追蒐る晴信是と見
く優さ者の奉動を我と喰留戰んとるを恐る小仍
只一息を蹴散をべーをふぐ箇
れば敵と侮ると進諸多計備へと動さば内藤修理正昌
豊馬場民部少輔景政原加賀守昌俊嫡子隼人佐昌勝
利式部信春小宮山丹後守昌友等敵を懸合と中小
修理正ち一の殿なれば畳を備と押く二手の分矢と射る

甲総
568

よろも尚繁く鉄炮と放ち矢と鎗と合せて突掛ひ武田方ハ
曲淵庄左衛門礒矢与三郎上杉方小ち梁田肥前守草卧三郎
一番二番の鎗と爭ひ入馬武者二三騎突落し命と塵芥と比て
悪戰を武田方ハ朝比奈監物三原右近孫右エ水河野但馬
守志村又右エ門平村大津等の一騎當千の勇將勇士得物
くくと追取く切てうれぐと扶方小ち安中左近進板倉郷右エ
門志渡丹波守塚田八左エ門遠藤五郎左エ門倉ヶ野民部佐
投藤兵衛今井市九郎君畑弾後守箕田源治兵衛宮内宗
左衛門殿仁右エ門勝田兵庫井上徳藏山田左京と始名と得
る剛士等死と一蹴と変し武田勢と切所小追と打回んと
勇と励ま安中城前守ち邪花威の鎗と三ツ山の甲と着し

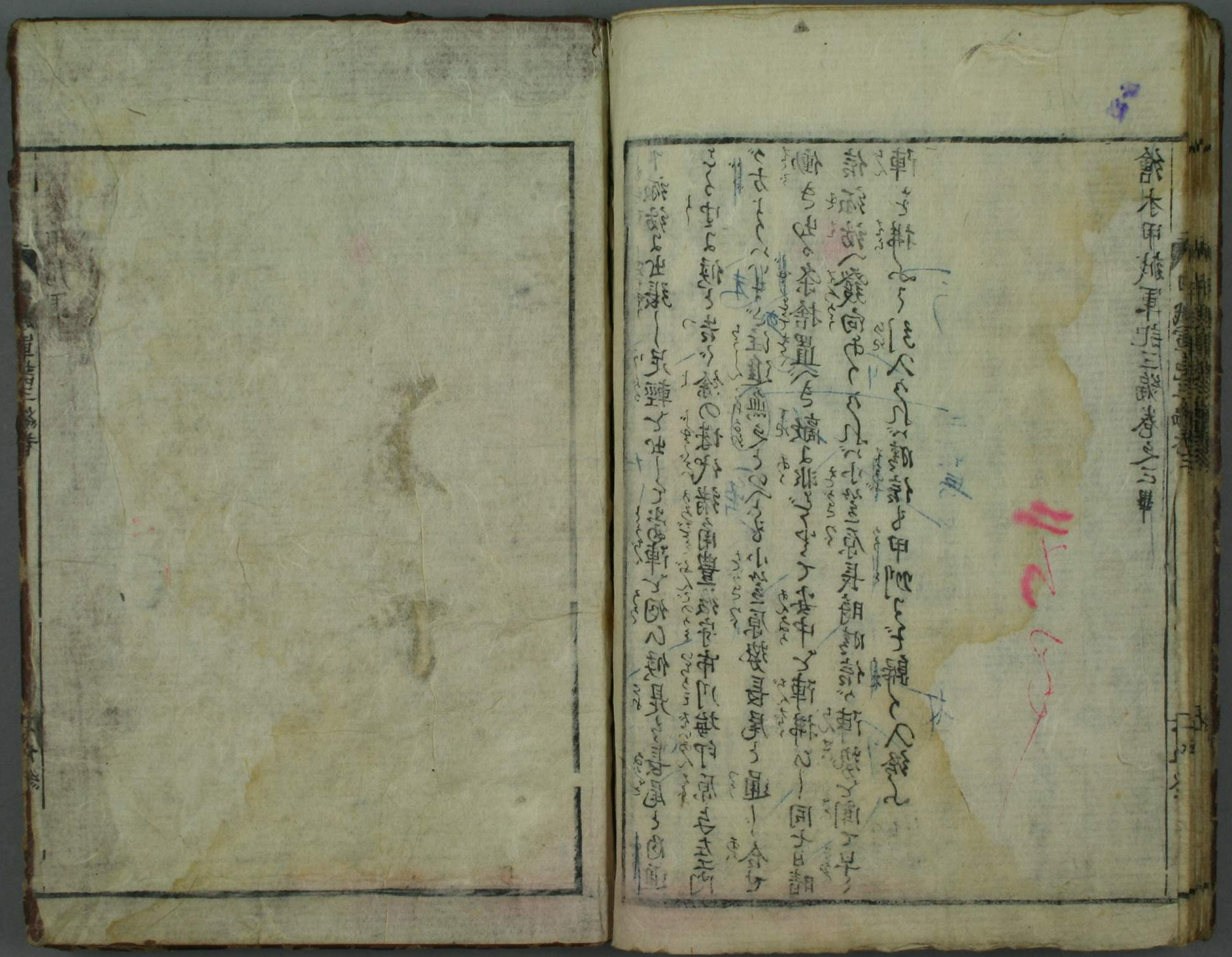
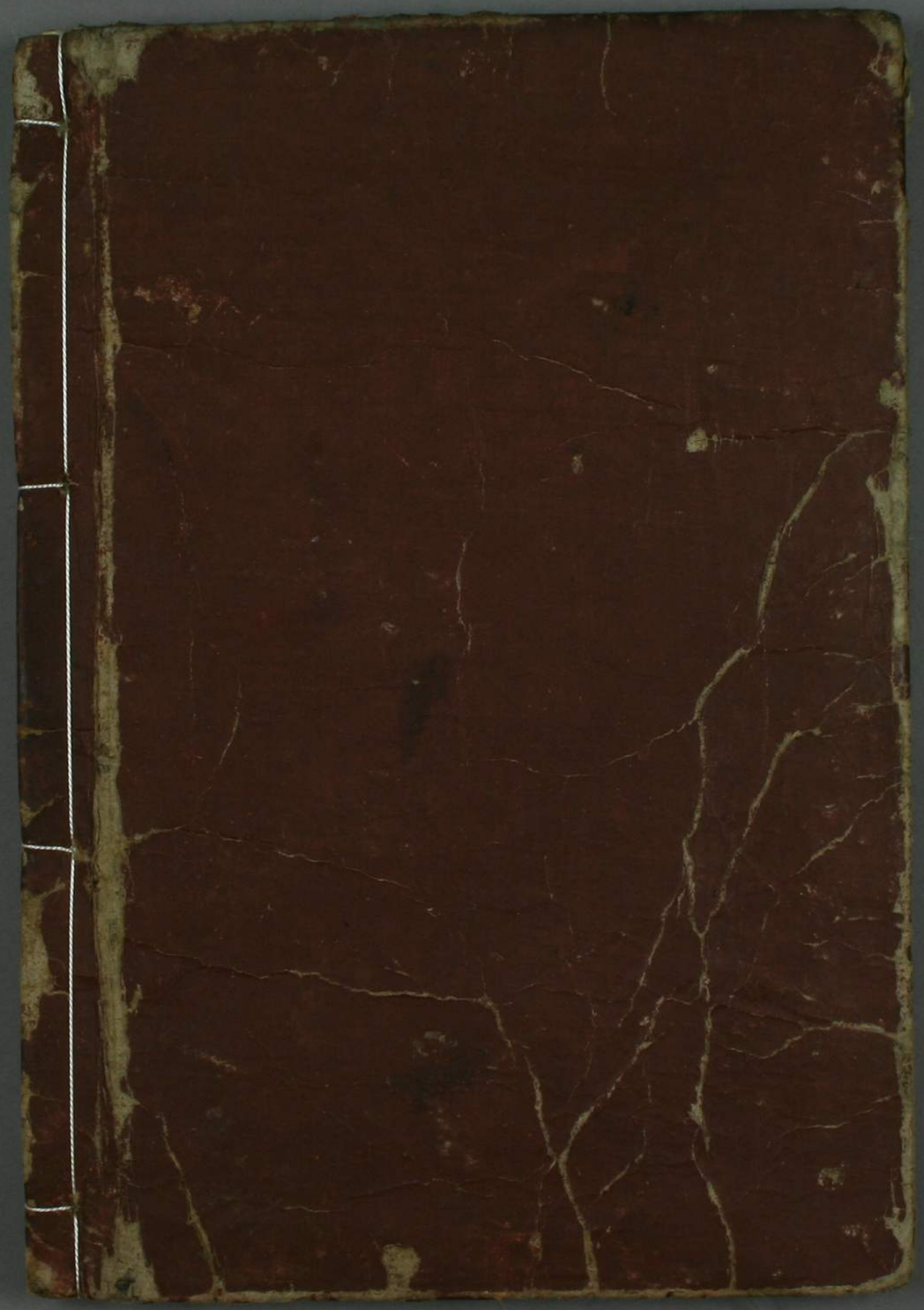
駿の馬と勝ち勢ひ迎てる内藤が勢ハ中く會釈もなく切て入る
内藤が先士倉橋四郎兵衛冬木隼人と切倒し出ると奉ひ
る雑こまる内藤勢會釈なく道と開けば安中弥突進こ内
藤修理正と鋒先と合せ受つ開ひつ戰ひく互ニ二三箇処ハ
海と鄙れと猛勇氣然として雌雄と変せんと爭ひが
内藤安中が郎縦ぬ押隔られて引離る馬場民部ハ郎原
加賀守清利武部小宮山丹後守ら松枝長野師岡松井内
白倉上内和田倉ヶ野と挑こ合内藤が白地ハ胴赤の旗馬場が
白地ハ黒と山道の旗と姫ぬ敵味方の雄籠南北ハ入乱と天地
の声馬騎の音天地ハ響く操合べ上杉方竟ハ切崩ら敗
くふものく敗走し武田勢ハ地理ハ疎らんば長く逐ぐ三尾

寺の此方小陣と取甚日の暮れと体めろ山本勘助鳩本ゑ参ハ
上杉勢敗軍と悔う今夜必定夜撃と嵬候べし是等の敵
思ふ小足どとゆとも味方ら地理と出らざる客戰敵ハ自國の
案内者ゆれば夜中ゑ合戰覚束く候間一術仕く敵と引
せく後相結く塀と陣さん事ら最安く候迚小宮山丹後守
安間三郎右エ門尉三科肥前守小笠原新弥原与左衛門ゑ
練略と授け各用意ゑ〜ぞ〜〜〜〜〜〜〜〜

武田埋伏安中勢と対事

扨も安中和田松井田倉ヶ野の九将ら客戰ゑ武田勢ゑ追
ふられて安ら〜ぶ思ひれんば和田松井田倉ヶ野の三將今夜也
ゑ刻ゑ武田が備ゑ夜撃せん安中師岡上田ら間道ゑ武

田が陣と焼討松枝白倉長野ら逃る敵と切所ゑ仕く斬んと
各兵粮と遣ひ焼草を用意ゑる所ゑ安中倉ヶ野の方小向
く火の光り見へんれば肥前守怪んで目も放〜ぶ見居ゑる間ゑ
火光次第ゑ数多く数万ゑ軍勢の押が引つ〜ゑ〜ゑと思ふ
所ゑ早遥ゑ鉄炮の音鯨波の声聞へ〜ゑ〜ゑば安中倉ヶ野大ひゑ
騒ぎ敵捷晴信某等が本陣の無勢ゑ仕考へ間道ゑら
攻寄ると覚へゑら本陣と敵ゑ取れてら叶ふ〜ぶと夜討ゑ
術も打捨ゑ一ゑ間章ふ〜めゑ安中倉ヶ野へ引ゑら勝ら
九月三日の夕の刻折節雨ゑ降く松明と消〜ゑれば
闇ゑ道と探ゑ探ぐ〜ゑら如ゑ兼く埋伏〜ゑる小笠原新弥
小宮山丹後守三科肥前守安間三郎右エ門尉天地も崩ら〜

斗り小関と発し絵と名乗と呼て突て懸れば引足付き
上杉勢思ひ付あり事なれば敵あしらへめく味方へ敵
対ら れ命を隔て者数多く右往左往小敗走を武田勢も
知安藤内の敵国なれば一騒と喚いて手柄く勢と
引上れば上杉勢も命辛じて安中倉ケ野へ引
入れば夫の光り人馬の音もなく寂寞として人氣なかりんば敵
狐狸の好りに晴信が奇兵に欺れて絵方なく各塁
中へ入獲武田勢は引に乗く寄来るべしと各防禦の用意
をなし晴信も上杉勢と縋て勢と両塁へ引續く倉ケ野和
田の両塁へ續く烏川の此方なる安中松井田の両塁と夜通べ
しと軍議有迫へ飯綱の投道弥治郎注進して云小笠原長時

下飯綱へ出張し足軽と出して安中陣と何ひ候是へ長尾と内通
をする中と告ぐ絵の塁代諸角豊後守市川塩印原与左衛門
ゞ方へ注進無之とのべども小笠原勢長尾と通じ合せ
働き出る条捨置べき敵へ非ど中して安中と陣掃ひし同七日晴
信飯綱へ発向あり小笠原長時晴信が陣勢と聞て早く
陣を掃ふ引入れば晴信も甲州へ帰りの絵ふ